

# 夜明けの街に清き一票

深谷晃成

## 【登場人物】

### 【シーンA】

トバリ……43歳。とある地方の市長。来週いっぱい任期が終わる。  
ミサキ……27歳。バーテン。  
アヤカ……34歳。OL。口で100万を当てた。カズキの元恋人。  
カズキ……31歳。フリーター寄りの無職。ミサキの事が好き。アヤカの元恋人。

### 【シーンB】

マリサ……18歳。高校生。彼氏と喧嘩した。ソウヤの双子の妹。  
ソウヤ……18歳。マリサの双子の兄。

### 【シーンC】

ノブオ……25歳。大学生。3浪した。ハルミの恋人。  
ハルミ……19歳。大学生。ノブオの恋人。妊娠した。

## 【舞台】

——バーカウンターがある。バーの傍には2つのドアが。  
シーンは、3つのエリアに分かれているが、特にエリア分けはされておらず、全てのシーンが同じ空間を共有する。

——音楽。

バーで流れているようなジャズ・ジャズロック・ジャズファンク・ジャズアレنج曲。照明がゆっくりと消えていく。暗転。

## 【プロローグ】

——バーカウンターの中にミサキ、立っている。

その服装からバーテンダーである事が分かる。

音楽フェードアウト。

明転。

ミサキ、静かに開店準備をしている。

しばらくしてマリサとハルミ、勢いよく入ってくる。

マリサはトイレの中へ、ハルミはカウンターの外へ。

その後を追って、ソウヤとノブオやってくる。

ミサキにはマリサとソウヤ、ハルミとノブオの2組が見えておらず、黙々と作業を進める。

2組もミサキともう一組が見えておらず、完全な別空間である事が分かる。

ソウヤはスウェットやジャージのようなラフな格好、マリサは冬服。

ノブオとハルミは秋服のような軽い服。

ソウヤ「ねえ」

ノブオ「なあ」

ソウヤ「どうしたの？」

ノブオ「何があったんだよ」

マリサ「うるさい！」

ハルミ「うるさい！」

ソウヤ「ねえ、どうしたのって」

ノブオ「いやうるさいって何だよ」

マリサ「ソウヤには関係ないでしょ！」

ソウヤ「関係ないって、俺」

マリサ「うるさい黙って！」

ソウヤ「ええ……」

——ハルミ、泣き出す。

ノブオ「何？ どうしたの？」

ハルミ「……わかんないよ」

ノブオ「わかんないって何が？」

ハルミ「どうしたらいいのかわかんないの」

ソウヤ「ねえ、どうしたの？ 親と喧嘩した？」

マリサ「違う！ 馬鹿！」

ソウヤ「……え、じゃあ彼氏と何かあったの？」

マリサ「……」

ソウヤ「彼氏と喧嘩でもしたの？」

マリサ「……もう無理、私達別れるかも」

ソウヤ「何で？」

ノブオ「何が？ 言いなよ。何かあったかわからないけどさ、相談乗るから」

ハルミ「……ノブ君に話して幻滅されるのが怖いの」

ノブオ「怖いって何だよ。大丈夫だって。困ってることがあるなら何だって聞くさ。ハルミの悩みは俺の

悩みだ。どんな下らない事だって全部受け止めるよ」

ソウヤ「え、だってこの前付き合ってたすぐじゃん……何かあったの？」

マリサ「あったの！」

ソウヤ「何があったの？ 彼氏何かしたの？ ……浮気とか」

マリサ「……言ってもめんどくさがらない？」

ソウヤ「……ならないよ別に」

マリサ「本当に？」

ハルミ「本当に？」

ソウヤ「本当に」

ノブオ「本当に」

マリサ「……あのね」

ハルミ「あのね」

ソウヤ「うん」

ノブオ「うん」

マリサ「ヨシキが、クリスマスにバイト入れたの」

ハルミ「私……妊娠したかも」

——間。

ソウヤ「……おお」

ノブオ「……おお」

——店の入り口が開き、トバリがやってくる。

トバリ「すいません」

ミサキ「あ、はい」

トバリ「あの、もう入れますかね？」

——暗転。

音楽。

J i , m n o t t h e o n l y o n e / S a m S m i t h

### 【シーンA その1】

——12月中旬。21時頃。

カウンターの前にミサキ、店の電話を耳に当てている。ミサキ以外の人はいなくなっている。

音楽フェードアウト。

ゆっくりと明転。

ミサキ「(電話の向こうから咳が聞こえる) あーあーあーあー、寝てて下さいよもー。全然はい、大丈夫ですからこっちは。熱下がったんですか？ 何度？ ……ヤバ。もうホントに寝ていいですから。はい、え？ それ聞いちゃいます？ 全然ですよ全然。あの、7時くらいにご新規2名様来たんですけど、もう帰られちゃってはい。だから全然大丈夫ですって。発注もしくんで。とにかく  
安静してもらって」

——そこに、アヤカやってくる。

アヤカ「こんばんはー」

ミサキ「(アヤカに気付き) あ、それじゃあお客様来たんで、ううん、アヤカさん」

アヤカ「だれー？」

ミサキ「(アヤカに) マスターです。ちょっと今日風邪で来れなくなっちゃって。代わります？」

アヤカ「うん、代わる代わるー！」

——ミサキ、アヤカに受話器を渡す。

アヤカ「もしもし？ 店長？ なに風邪ー？ ちょっと働きすぎなんじゃない？ 大丈夫？ うんうん。

もー……あ、看病しに行つてあげようか？ いらない？ まー頑張つてよー。うん。また来るから、じゃあねー」

——アヤカ、電話を切る。

アヤカ「あ、切っちゃった。ごめん」

ミサキ「大丈夫大丈夫。もう話終わってたし。え、お仕事終わりですか？」

アヤカ「そうそう。まだバタバタしてんだけど、疲れたからなんかあったら連絡してって言って上がった  
ちゃった」

ミサキ「土曜なのに忙しいんですか？」

アヤカ「んー。12月だからねー」

ミサキ「あー」

アヤカ「そっかー店長今日いないのかー」

ミサキ「アヤカさん何飲みます？」

——アヤカ、席に座る。

ミサキ、コースターとチャームを出す。

アヤカ「ありがと。あーどうしようかなー。じゃあ、この店で一番高いの」

ミサキ「ええ？ どうしたんですか？」

アヤカ「ねえ聞いて聞いて。実はね。ロト当てたの」

ミサキ「えー！ 嘘！」

アヤカ「ホントホント。昨日銀行行ってきて換金してきた」

ミサキ「え、いくら当てたんですか？」

アヤカ「3等。100万」

ミサキ「え、凄！ ヤバいですね！」

アヤカ「でしょー？ 凄くない？ 嬉しくてその場で写メっちゃった（携帯の画面をミサキに見せる）」

ミサキ「わーホントだ！ へー……。え、ホントに高いの飲みます？」

アヤカ「飲まない。いつもの」

ミサキ「え、あ、ハイボールで」

アヤカ「うん。いやねーこの100万どう使うか迷ってたよねー」

ミサキ「あー。なんかおっきな買い物すればいいんじゃないですか？ 家具とか」

——ミサキ、ハイボールを作り始める。

アヤカ「うーんそれもいいんだけどねー。実はね、近々引っ越す事になっちゃってさー。あんまり荷物  
増やしたくない」

ミサキ「え、アヤカさん引っ越しちゃうんですか？」

アヤカ「そうなのー。ちよっと本社勤務になっちゃって。都内にねー」

ミサキ「へえー。おめでとうございます」

アヤカ「おめでたくないよー。ここで飲めなくなるしさーいろいろめんどうかいし」

ミサキ「あー……。ハイボールです」

——ミサキ、アヤカにハイボールを出す。

アヤカ「はい。……後どのくらいかなあ。ここ来れんのも」

ミサキ「えーそんな寂しい事言わないで下さいよー」

アヤカ「だって給料上がる以外良い事無いからさー。なんていうか、このご時世さ、東京に出る意味ってある？」

ミサキ「あー」

アヤカ「なんかさ、ネット環境もある程度には発達してて、地方にいても欲しい物は買えるじゃない？

そりゃ都心の方が物価は安いだろうけど、そこまでして東京に出たいかっていうね」

ミサキ「確かに確かに。上京しても友達とか会えなくなるだけで何にも良い事ないですよね」

アヤカ「そうそう。ここはさあ、まあ南東北の割には頑張ってる方じゃない？」

ミサキ「うんうん、栃木は北関東ですけどね」

アヤカ「だから全然苦じゃない分、東京に出る意義を見出せないんだよねー。でもさ、結婚してる訳じゃないから辞令を断る理由も無いから仕方なく分りましたって言っちゃったけど、あーやだよだ。

こんな事ならもっと手抜いて仕事しとけばよかった」

ミサキ「マスターも知ったらシヨックだと思えますよ」

アヤカ「あー。そういうや今日店長いないならカズキも呼べば良かったかな」

ミサキ「ちょっとー。辞めてくださいよもう」

アヤカ「あ、電話してあげるよ。もしかしたら来れるかも」

ミサキ「良いですって。もー」

——アヤカ、携帯で電話を掛ける。

アヤカ「……あ、もしもし？ カズキ？ 今セプテンバーにいるんだけど来ない？ うん、そう。あー

金欠？ 今日ねー店長お休みでお店に私とミサキちゃんしかいないよ。うん、あそう、うんわか

ったーはい」

——アヤカ、電話を切る。

ミサキ「カズキさん金欠なんですか？」

アヤカ「うん。あ、でも今から来るって」

ミサキ「あ、来るんだ。えー」

アヤカ「え、嫌いな？」

ミサキ「いや、嫌いではないんですけど、その、ちょっとめんどくさいなとは」

アヤカ「まあねー。もういつそ付き合っちゃえば？ そこまで不細工でもないし」

ミサキ「うーん付き合うとかは違うかなー」

——そこに、トバリやってくる。

トバリ「あ、すいません」

ミサキ「いらっしやいま……ああ、どうも。どうぞ」

アヤカ「どなた？」

ミサキ「さっき開店前にいらっしやったので」

トバリ「いやー……お店開くまで駅の近くのドトールで時間潰してたんですけど、閉店までいちゃって」  
ミサキ「ええ？ 結構いましたねー。ドトール」

——トバリ、アヤカから少し離れた席に座る。

トバリ「いやーハハハ……。スコッチをストレートで」

ミサキ「スコッチ。かしこまりました」

——ミサキ、トバリにコースターとチャームを出し、スコッチを注ぐ。

アヤカ「いやーカズキも中々引かないよね。あれなんなんかね。いい年してね」

ミサキ「私に聞かないで下さいよ」

アヤカ「なんかこう……悪い意味で、中学で時間が止まってるよね」

ミサキ「あーなんかわかりますそれ。子供っぽいついていうか……あれ、アヤカさんのくらい続いたんでしたっけ」

アヤカ「あ、カズキと？ どのくらいだっけ。半年？」

ミサキ「あー……結構」

アヤカ「うん半年かな。すごくない？ カズキと半年って」

ミサキ「いや凄いですよ。え、何で付き合おうって思ったんですか？」

アヤカ「なんだったっけなー。思い出せないなー」

ミサキ「(トバリに)「ちらスコッチになります」

——突如、ドアから大きな音。どうやらドアの外開きと内開きを間違えている。

アヤカ「あ、来た」

ミサキ「え、カズキさん？ 早くないですか？」

アヤカ「(ドアに向かって) それ引くんだよー」

——ドアが開く。

カズキ、アパレル店の袋を持って勢い良く入ってくる。